

# みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 中国青海省・土族の装身文化の変容

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 庄司, 博史 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5658">http://hdl.handle.net/10502/5658</a>

# 中国青海省・土族の 装身文化の変容

庄司 博史

はじめに

土族（トゥー族）は中国青海省に農耕を主産業とし、定住生活を営む少数民族で、国際的にはモンゴル・Mongolとして知られている。モンゴル Mongghul あるいはツィガン（白）・モングルという自称が示すとおり、系統的にはモンゴル系の民族である。彼らの土族語は一般にモンゴル語といわれる内蒙古の代表的なチャハル語やオルドス語などとはかなり隔たり、これらとの意志の疎通は困難であるが、比較言語学により疑問の余地のないモンゴル語系であることが証明されている（注1）。そのほか一部に残る酪農技術や馬・ラバを食べぬ習

慣、さらにシャマニズム信仰、東アジア遊牧民の間に伝わるゲゼル物語の伝承など、彼らがかつては遊牧生活を行なっていたモンゴル系民族であることを推測させる痕跡は少なくない。

しかし彼らを日常の生活から判断するなら現在は農民としか言いようがない。それも漢族農民と極めて近いのである。農耕、村落形態、四合院を基本とする住居など青海に居住する漢人のものとほとんど同じ要素を持つものが多い。歴史的に明代に「西寧土人」として『洪武実録』に現われて以来、中国王朝とは深い関係にあったほか、現在も漢族との距離は近い。それにもかかわらず土族は民族集団として存続し、特に言葉と民族衣装においては漢族とは異なる独自のものを保有してきた（注2）。著者は近年、少数民族における言語保持の状況とその要因について土族を対象に青海省で調査を行ってきたが、ここでは同様の観点から民族衣装について考察することにした（注3）。

## 土族

土族の人口は一九八〇年代半ばで約16万人あり、そのうち約14万人余りが青海に居住する。青海では土族は互

助土族自治県、民和回族土族自治県、大通回族土族自治県の3地域に集中している。それぞれの県における土族人口と県人口全体に占める土族の割合は順に、約5万1千人（15%）、3万2千人（10%）、3万人（12%）である。これらは自治県とはいえ、土族は漢族に比べて少数であることでは共通している。しかしこれらの数値は平均値であつて、県を構成する郷、さらにそれを構成する村単位では土族が多数派を占めるところも存在する。つまりある程度の住み分けがおこなわれている。

著者が調査した互助県は唯一の土族自治県で、青海省の首都西寧市までわずか30キロメートルあまり。祁連山南麓に位置し平均海拔2700メートルで大陸性気候のため、冬期の寒さは厳しいが、夏の温暖な気候を利用し山間河川の低地でのハダカムギ、小麦などの栽培を中心とする農耕を営んでいる。県人口に占める漢族の割合は多いが、絶対人口、土族人口の割合、土族村の多さからいって互助県は土族の中心地であるといえる。そのほか言語の保存度、民族文化政策においてもそうよぶにふさわしい条件が揃っている。以下、この互助県を中心に土族の特徴をもっとよく表わしてきた女性の衣装について述べることにする。

### 伝統的民族衣装

まず現状と比較する必要があるから、文献の語る社会主義革命以前の伝統的装身法について概観する（注4）。年齢・地域・財力により異なっていたが、互助県、大通県での代表的な女性の衣装は次のようなものである。最も基本的なものはたて襟つきの長衣スنبール（長袍）で、前の大きな衿（あわせ）の部分は右脇下までであるが、上部は襟元のボタン（紐子）で止めることができる。膝近くまでとどく両袖筒には赤、黄、緑、紫、藍の幅広い布が巻くように縫いつけられている。かつてはこれらは重ね着した着物の袖口がずれたように取りつけられていたらしい（注5）。長衣の上には腰までの丈で赤、紫あるいは青の無地の袖なし短衣グアツィを着る。さらに古い時代にはダフという、向かい襟、膝までの長さの袖なしジャケットが用いられたが、この前の裾には錫箔を巻き、黄房飾をつけた小さい紙の筒が無数につるされていた。帯プセーは広く長い布で、幾重にも腰に巻きつける。帯の両端には刺繍の施された幅20センチほどの飾り布が2、3枚取りつけられ、その部分を前後、あるいは一方に垂らす。また帯には銅銭の束や香袋、針鞆などがつるされた。

筒の広いズボンには膝下部分に取りはずし可能な飾り布が縫いつけられ、この色が既婚、未婚の標識であった。

土族の女性にとって刺繍の腕は昔からは最も重要な器量とされた。帯の他、襟、靴、短衣、長衣の袷の部分などに、花、蝶、鳥や長寿、幸福を示す図案模様が鮮やかな糸で施された。女性が集まると互いに帯の刺繍の品評を始めると記されているが、これは今も変わらない。このように衣装を華麗な装飾で飾り立てるのは成年既婚女性の特権であった。未成年のものは簡素で、40歳を過ぎた女性の衣装も華やかな色は抑さえられ、刺繍も外された。

かつて既婚女性にとって衣服以上に重要であったのは頭飾であった。これには地域により9種もあったといわれており、それぞれ材質、形状や髪型において異なっていたが、いずれも付属の装飾をいれると極度に大きく複雑で非活動的なものとなっていた。中でもシゲ・ニウダルとよばれていたものは巨大で3キロほどもあったという。これは頭上に上向きにつけられた箕形の台があり、赤い房で縁飾が施され、左右の両面には胸元にまで至る房飾がつるされる。冠の前にはガラスや陶器の飾りや珊瑚・貝を連ねた紐飾りがあり、後部には八枚の銅版が

扇状に取りつけられ、この中央の盾と槍をかたどったかんざしから房飾がつるされた。未婚の女性は紅紐で後頭中央に大きな弁髪を結び、両髻からの二つの弁髪と先のほうでひとつにまとめた。この他、首飾りとして、布製の円環に28枚もの貝殻を張りつけたものや、大きな房付きの銀製耳飾りなども重要な装飾であった。

このように女性の民族衣装は重く窮屈そうで機能的とはいえなかったが、本人たちにとって特に苦になるものではなかったとはいえない。一九一〇年代10年以上土族のもとで調査を行なったシュラム Shrum は祭などで女性たちがいかにも誇らしげに着物をまとい歩き回っていた様子を描いている(注6)。絹布や帯をなびかせ、腰につるした銅銭の音を響かせながら満面の笑みを浮かべて歩く様は、あたかも幸福と美の頂点にあるかのようであったという。次に述べるように衣装自体は現在幾分変わってはいるが、町や祭で見かける女性たちの民族衣装に対する誇りは衰えていないようである。

### 現在の民族衣装

現在成人女性の民族衣装は、かつての多様性に比して均一化と簡素化が進んでいるようである。筆者が訪れた





1 互助県威遠鎮古城村 婦人の晴れ着

互助県のいくつかの郷では、女性の長衣はすべて鮮やかな五色の袖を特徴として残していた。さらに両肩には胸から背中にかけて幅十センチほどの黄色の布片が縫い付けられ、紺、黒など暗い地布との鮮やかな対象をなしている。その上に袖なしの短衣を着ない場合は、立て襟を背広の襟のように折返し青い裏地を表にだす。刺繍を施した帯端は上で述べたように垂らす場合もあるが、互助の首府威遠鎮付近では一方の帯の装飾部をまわしのよう

に前身に巻きつけることも多い。

日常使われる長衣は、色褪せた晴れ着や装飾部を抑えたものだが、一般に袖の五色は保持している。また長衣を着ないで、市販されている長袖シャツの上に袖なし短衣という組み合わせも珍しくない。長衣、短衣とも市販のシャツの上に着ることが一般化しているためか襟を付けず、シャツの襟を出すことも行なわれている。いずれの場合も帯は用いられるが、刺繍のない暗色系のものである。文献にはかつて長衣の下に赤い襷付スカート（褶裙）や、ゆったりしたズボンも用いられたとあるが、現在ではもっぱら市販の細い脚筒のズボンに置きかわっている。このようなズボンと短衣の組み合わせは日常作業に用いられるほか、短衣の袷部分に刺繍の縁取りや図案



3 民和県三川地方の伝統的衣装



2 互助県東溝郷大庄村 孫を背おう老女

模様を施し子供や青年男子の晴れ着として用いている。頭飾の変化は著しい。かつて地方ごとに異なっていた莊重なものは見られない。現在の文献は総じて一九三八年以降、青海を支配していた軍閥により強制的に廃止されたとしている(注7)。しかし新政権も非実用的かつ封建社会の遺習とみなし、これらの復活を奨励したとは考えられない。

現在互助県の成人既婚女性性は周囲のつばが均一に反り上がった大きなフェルト帽をかぶる。つばの外側、つまり見える部分には地方ごとに独特の金色綿や刺繍の縁取りが施されている。ホアル花爾といわれる歌会ではつばの平らなフェルト帽(礼帽)を造花で飾ったものも見られる。頭髪は後ろで一つに束ねたり、三つの弁髪の二つを肩から前に垂らしたり、後で真ん中の一つと合わせるなど様々であるが、村ごとに一定の傾向はあるようである。いずれの場合も老女を除き、弁髪はビーズ、珊瑚、貝などを連ねた紐で飾る。しかし、未婚女性性は帽子はかぶらず、黄色、赤などの頭巾やスカーフで髪を覆う程度である。身を最高に飾りたてるのは成人女性であるという点において、現在も過去も共通しているようである。

民和県南部も三川地方の状況を若干述べておくが、互

助県とはいくぶん異なっている。ここではかつて、紅、緑のシャツに、世代により異なる色の襷入りスカートをはいた。そのうえに前でとめる長衣をはおった。これらも礼服では襟、肩に刺繍を施し、袖は五色の絹布を綴ったとある。髪は弁髪にせず髪や後頭部にまとめて留める。その上に珊瑚と房で飾った杵をかぶるが、これは頭頂部に金糸、銀糸、真珠で翼を広げた飛鳳をかたどった飾りを備えていた。

しかし現在このような土族の民族衣装といわれるものは、日常はおろか晴れ着としてもほとんど用いられることはなく、男女を問わず漢族と基本的に同じである。一九五〇年代末、階級社会の遺物として民族衣装一掃が計られ、以降復活することがなかったといわれる。しかし、纏足やたて衿・右衿の上衣（襖）とゆつたりしたズボンだけの組み合わせなど、老女に漢族の伝統的装身習慣が残っていることから、それ以前にも民和の装身文化はかなりの漢化は進んでいた可能性はある。

### 民族衣装に対する人々の意識と使用の現状

以上のように現代の衣装は伝統的なものとは、かなりの変化をとげている。しかし互助県の土族の場合必ずし

も漢族への同化という方向へ進んでいるとはいえない。前段でも指摘したが、かつて地方、年齢、財力などにより多様であった土族の衣装の変化において、二つの傾向が指摘できる。そのひとつは均一化である。かつては多くの種類があったという民族衣装は少数のタイプに収斂しつつあるらしい。装飾の色や柄、着付けなどで地域が特定できるというが、全体としては、以下にあげる土族の民族衣装の特徴というべき条件の範囲内におさまっている。

第二の傾向は衣装の構成の単純化・明晰化である。これは衣装自体が単純になっているということではなく、複雑、場合によっては煩雑でもあった衣装構成から「土族的」ともいえるいくつかの特徴を抽出し、それらを強調する傾向であるともいえる。

この結果、現在土族の女性の衣装の特徴とみなされるものは、その装飾、特に帯に施される手のこんだ刺繍と図案の豊富さ、袖筒が多色の布によって飾られた長衣、緑の反り上がったフェルト帽などにしほることができる。特に刺繍と五色の使用が意識されていることは、土族紹介の文献において必ず強調される他、これらの由縁を語る伝説にしばしば言及されることによって推察できる



4 民和県三川地方納頓祭りに集まった老女 衣装は漢族とかわらない

(注8)。土族にとって刺繍の持つ重要性は、世界で唯一という特殊な刺繍技法、「盤繡」が特徴として常に強調されることにも現われている(注9)。

このような変化は、多少のバリアントは温存しながらも大勢としては、土族性といわれるものが抽出され、それを中心に意識的に土族の民族衣装の再編へと向かっているようである。これらは特に漢族との対比において顕著で、漢族との混住地域では民族の表象性という点では十分機能を果たしている。調査ではいくつかの村で土族や漢族に土族の一番の特徴というものを尋ねたが、最も多くあげられたのが言語と民族衣装であった。これは民族衣装をほとんど用いない村においても同様であった。

使用に関していえば、現在、互助県において、このような民族衣装は各地の廟祭など宗教行事や歌会である花爾、家族の祝いなどに用いられるが、日常においても女性の間ではまだかなりの人が着用している。特に農村部では既婚女性以上の使用度が高い。彼らと漢族社会との密接な関係、そして百万都市である西寧との隣接性を考慮した際、一見意外に思えるほどである。

しかし、どの地域においても一様に保存されているわけではない。互助県の西に隣接する大通県では日常はお



6 互助県東溝郷姚馬村 畑へむかう婦人

ろか花爾のおいても民族衣装を見ることはまれである。互助県においても村のほとんどの女性が野良作業においてさえ使用している地域もあれば、中には日常の使用からほとんど消え去った地域もある。やはり最近の傾向としては徐々にではあるが、使用は減少していることも事実らしい。ことに威遠鎮など町では、周辺の村落から訪れる女性以外に民族衣装を見ることはない。しかし、町からわずか3キロメートルほどの姚馬村では既婚女性のほとんどは民族衣装を使用している。保存度を左右する要因を探ろうとしたが、必ずしも土族村と町（漢族社会）との距離、村人口にしめる土族・漢族の割合だけが決定しているのではないようである。

#### おわりに

前段では漢族社会との隣接にも関わらず土族においては全体として民族衣装が極めてよく保存・使用されていることを指摘した。これらは、変化をしながらも、漢族との弁別性の標識という点では十分役立っている。しかし一方では、保存の度合いは現実の漢族との距離とは必ずしも対応しているわけではない。初めの事実に関して、漢族と隣接し、また生業・居住形態が類似するため、

漢族への同化・吸収に対する危機感が、民族衣装にそのような機能を強化した可能性がある。後者については、村の土族の人口、財力、民族意識、他の民族伝統など複合的な要素、いわば民族度が関与しているように思える。しかしこれらはまだ推測の域をです、民族衣装の変化、使用の実態の詳細な調査とならび、民族関係など土族社会の総合的な研究による実証が必要である。

(国立民族学博物館助教授)

(注1) 言語学的に土族の起源について論じた優れた論文に次がある。  
李克郁『蒙古爾(土族)和蒙古語』『西北民族研究』第一期 一九八八年

(注2) 土族の歴史、宗教、習俗など全般にわたる概説には次がある。  
《土族簡史》編写組『土族簡史』青海人民出版社 一九八二年、郭環『土族』民族出版社 一九九二年

(注3) この小論は、青海土族の言語保持についての調査を主たる個人的課題として加わった文部省科学研究費助成調査「アルタイ・天山地域における遊牧の歴史民族学的研究」(代表 松原正毅)の成果の一部である。調査メンバー、青海民族学院民族研究所の賈端備所長、李克郁副所長、秦永章研究員、互助土族自治县人民政府民族宗教委員会および、多くの土族の友人には調査や滞在でさまざまな便宜をはかっていただいた。記して感謝する。

(注4) 伝統衣装については次の文献を用いた。

郭環前掲書 pp.48-51、李存福「七彩纷呈的土族婦女服飾」『中国土族』一九九二年 創刊号 pp.68-72、索文清・李春生「土族婦女的服裝与頭飾」『中央民族学院学报』一九九〇年4号内表紙 L. M. J. Shram, The Mongols of the Kansu-Tibetan Frontier. Their Origin, History, and Social Organization. Philadelphia, 1954

(注5) Shram 前掲書 p.120.

(注6) Shram 前掲書 p.123.

(注7) 前掲『土族簡史』p.102

(注8) Shram 前掲書 pp.118-9、李存福 前掲書 p.70.

(注9) 昨年(一九九三年)秋、互助県威遠鎮において、このような刺繡を重要な民族文化として保存・開発し、さらに刺繡を中心に手芸を県の事業として振興するため土族刺繡工藝開發公司が設立された。役員には県政府の民族担当幹部や文化館員などが加わっており、特定の刺繡を土族の伝統技術として保護・管理するために商標なども考案中であった。